

6節。「わたしにつながっていない人がいれば、枝のように外に投げ捨てられて枯れる。そして、集められ、火に投げ入れられて焼かれてしまう。」

【TEV】 Those who do not remain in me are thrown out like a branch and dry up; such branches are gathered up and thrown into the fire, where they are burned.

5節では主イエスにつながっている（留まっている）者は、「豊かな実を結ぶ」と語られているが、ここでは主イエスにつながっていない者について語られている。「ぶどうの木に止まるか、止まらないかのいずれかしかない。第三の道はない」（伊吹）

2節では、主イエスに「つながっていないが、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる」とあるが、5節と6節では、主イエスにつながっていれば実を結ぶことは当然のこととして語られている。それゆえに、主イエスにつながっている（留まっている）者は「取り除かれる」ことはない。取り除かれるどころか、反って、「いよいよ豊かに実を結ぶように手入れ」される。

自然のぶどうの木の場合、幹から切り離された枝は枯れてしまう。そして枯れた枝は、「集められ、火に投げ込まれて焼かれてしまう」。これは審き、審判をイメージするような言葉である。審判は、救いへの招きと約束と切り離すことができないものである。救いへの招きを拒絶することがすなわち審判を招くことになる。「光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。」（ヨハネ 2:19）

7節。「あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にいつもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。」

【TEV】 If you remain in me and my words remain in you, then you will ask for anything you wish, and you shall have it.

原文では、「もし」（If）から始まっている。「つながっており」と「いつもあるならば」は、いずれも「メノー」（remain）が用いられている。

5節では「人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば」とあるが、ここでは「わたしの言葉があなたがたに内にいつもあるならば（留まっているならば）」となっている。

「イエスの言葉が止まることは、イエス自身が止まることである。……。言葉が止まるということには、それを絶えず聞くということが含まれる。……。イエスに止まるとは、その言葉を聞くことなのである。それを聞き、『言葉によって、あなたがたは既に清くなっている』（3節）ということが実現する。……。言葉がその者なのである。」（伊吹）

主イエスの言葉を絶えず聴く者として、「望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる」と言われている。14章13節にも「わたしの名によって願うことは、何でもかな

えてあげよう」と言われている。ここでの「望むもの」「願い」とは、第一に、主イエスの言葉を聴いた者の望むこと、願いである。伊吹氏は「その望むこととは、聞いた言葉への答えであり、それはぶどうの木に止まることであり、止まって多くの実をつけることにほかならないであろう」と述べている。第二は、「望むものを何でも願いなさい」という言葉を文字通り理解することである。但しその場合も、「その願いがかなえられることは、多くの実をつけることへと向かって行く」（伊吹）。要は自分の欲望を満たすことではない。主イエスにつながっている（留まっている）者の願い（祈り）は無視されることはない。

「イエスに止まる者の願いの成就是常に救いのしるしともなる。願う者は希望のうちに生きるのである。祈りとは願いなのであり、その成就是、常に救いのしるし、ないし前兆であり、最終的には救いそのものの成就是である。」（伊吹）。

伊吹氏の言葉は、祈りがかなえられたということは、主イエスにつながっていることとしるしであり、それは即ち、救いのしるし、ないし前兆である、ということであろう。

「『うちにいつもある』とは、『まもられた』（*geborgen*）ということをも意味する。」（伊吹）

8 節。「あなたがたが豊かに実を結び、わたしの弟子となるなら、それによって、わたしの父は栄光をお受けになる。」

「あなたがたが豊かに実を結び」という言葉から解るように。7 節の「望むものを何でも願いなさい」とは、あくまでも「豊かな実を結ぶ」ための願いである。

主イエスの「弟子」は、主イエスにつながっている者であり、主イエスにつながっている者は、豊かな実を結ぶのである（5 節）。

「弟子は多くの実を結ぶことで弟子であることになる。」（伊吹）

「それによって、わたしの父は栄光をお受けになる」。「わたしの父」は 1 節においてはぶどうの木を手入れする「農夫」として語られている。その農夫にとっては、手入れしたぶどうの木が豊かに実を結ぶことほど嬉しいことはない。

9 節。「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。」

ここで語られている「愛」は「ἀγάπη、アガペー」である。無条件の、他者を生かすための自己犠牲的な愛である。主イエスの父なる神はそのように独り子イエスを愛され（アガパオー）、主イエスはそのように愛されておられる。その主イエスが、御自分が父から愛された愛で「あなたがたを愛して来た」と言われる。

「これまで愛（アガペー）という語は出てこなかったが、今や 9、10(2 回)、13 節に、『愛する』は、9、12、17 に出る。・・・この 9 節 a はヨハネによる福音書の愛の根本構造を短い文で明らかにしている非常に重要な文である。こうして 13 章 1 節に述べられたイエスの愛は、父がイエスを愛した愛に相応しいものであった。すなわちイエスの愛が分かればわかるほど父の愛が分かるのである。ここで 1 節に言われた栽培者としての父と、ぶどうの木とその枝の関係が愛によって言い表されている。・・・今まで父のイエスへの愛とイ

イエスの弟子たちへの愛は、その二つの愛が等しいものとして述べられている。イエスの弟子たちへの愛は、父のイエスへの愛と比べられているのみならず、後者が前者を根拠づけ、前者は後者の現れでありその啓示である。『わたしもまたあなたがたを愛した』の『愛した』という形は、命を与えるために命をすてるという十字架の愛が遂行されたということを示す。」（伊吹）

「わたしの愛にとどまりなさい」。「わたしもあなたがたを愛してきた」ということに対する応答としての命令形になっている。

「4, 5, 6, 7 節の『わたしに止まる（つながる）』の『わたし』は、『わたしの愛』になる。」（伊吹） わたし=わたしの愛。

「この愛に止まることがイエスのうちに止まることであり、これがすべてなのである。そしてこれは多くの実を結ぶことになる。ここではわれわれの愛についてはイエスの愛にとどまること以外には何も話されない。それがすべてを含み、また多くの実を結ぶことになるからである。われわれの愛は、イエスの愛が父の愛に対する答えであったように、イエスの愛への答えである。イエスの愛に止まることがその答えなのである。イエスが父に愛される者として、このことによってのみ規定されているように、われわれもイエスに愛される者としてのその存在の規定を受ける。ここで愛はひとえに愛されることへの答えとして規定されている。

4 節以下の『わたしのうちに止まる』ということは、ここで明瞭に『わたしの愛に止まる』として開示された。……。すべてが愛によって説明されるのである。これまで約束されて来た『永遠の生命』も愛によって説明された。愛は命を与えることに他ならないからである。1—12 章を貫く『命』という語は 13—17 章で後退し、『愛』によって取って代わられるという。『命』『生きる』『生かす』は 1—12 章で 50 回、13—17 章で 6 回使われるのに対し、『愛』『愛する』は 1—12 章で 6 回使われるのに対し、13—17 章で 31 回使われている。ぶどうの木は愛によって成立しているぶどうの木なのである。……。愛は命を与えることに他ならず、愛が命なのである。父の愛がぶどうの木に命を与えている。

8 節の『父が栄光を受ける』ということはここで明らかにされている。『栄光を受ける』とは、栄光に輝くと言ってもよいであろう。それは父の愛の輝きがイエスの愛において、さらに弟子たちにおいてイエスの愛によって輝くことである。さらにイエスによって愛された者としての共同性をもととして、横のつながりである共同体が成立する。

枝もぶどうの木において一つの共同体をなし、それが教会なのである。教会の真の姿とは、それが教会の制度によって支えられているのではなく、その逆に制度は愛に仕えるものとしてのみその存在理由を持つのである。……。愛、それも無条件の愛に仕えるものとして制度はあり、それに反する制度は改変され、排除されなければならない。また同時にそれについての何を差し置いてもなされるべき反省が教会の第一の使命であり課題であり、その革新であり、教会に命をもたらすものなのである。ぶどうの木の説話にさいし教会制度について語られていないのはこのことが自明の事柄であるからなのである。なぜ語られていないのかということについても深い自省が必然的に求められている。」（伊吹）

10 節. 「わたしが父の掟を守り、その愛にとどまっているように、あなたがたも、わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる。」

「掟」と訳されている言葉(ἐντολή、エントレー)は、他に「命令、命じる」とも訳されている(12:49—50、13:34、14:15、21、31、15:12、17 など)

14 章 31 節において主イエスは「わたしが父を愛し、父がお命じ(エントレー)になったとおりに行っている」ことを明言し、主イエスと父なる神との関係を語っているが、その関係が、ここでは弟子の主イエスとの関係において実現する。「愛にとどまる」ために掟を守ることが言われている。この先の 12 節と 17 節にも繰り返される。

「このことがイエスの教会について決定的に重要であることがこれ以上はできないという形で強調されている。ここでは直接にこれまで言われたことから『実を結ぶこと』が考えられる。それは 12 節(「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛しなさい。これがわたしの掟である」)に明らかにされる。12 節は 10 節にさかのぼり掟の内容を明らかにする。14 章 15、21、23 節でも掟ないし掟を与えるということは愛との関連で用いられている。・・・。

この愛するという掟を守ることが命なのである(12:50)。この掟ということは、愛の実行の命令ということである。教会ということについては、教会法というものは各法が愛の実行ということによって直接に基礎づけられていなければならない、制度を確保するために基礎づけが行われるのではない。また『愛に止まる』ということが神秘的な静観的な態度を意味すると言っているのでもない。」(伊吹)